

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	39 / 2018 / 20-21 (再編集版)
タイトル	特別寄稿 樹氷をつくる北八甲田の気象
著者名	番地 与右工門

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

特別寄稿

樹氷をつくる北八甲田の気象

番地 与右工門(Yoemon Banchi 気象研究家)

八甲田山は奥羽山脈の北端にあつて、日本海、太平洋、陸奥湾と、それぞれ異なった海洋に囲まれている。それらの海水から発生する水蒸気と、内陸性の水蒸気とが上空でひとつになって、八甲田山系の動植物の生活環境を潤しているが、北八甲田は外洋の影響によって天気の変化が早く激しい。これを、変化性外洋型気候と呼んでいる。

一方、外洋から南八甲田、十和田湖へと奥地に進むにつれて、外洋の影響は小さくなって、内陸性の気候へと変化していく。

春から夏の気候

東高西低といわれるこの時期の天気は、一般に南西風が多く、低気圧が発生する場所と通過する場所(日本海側と太平洋側)では大きく異なる。

八甲田の春は4月中旬ごろからといわれているが、6月下旬ごろまでは冬型と夏型の天気交互に入り組んでいるため不安定である。日本海側の気圧の谷が、東北地方の太平洋側を三陸沖から北海道へ通過するときは南西風、通過後は北東風に変わる。さらに北西からの吹き返しが入り、それも次第におさまると西風の季節風へと安定する。

この季節には、まだ八甲田山の東側に多量の残雪があるため、気温によってはガスが発生する。このガスは天気の判断に役立てることができる。

太平洋側に低気圧が発生して北上するとしても、風速が秒速5~6m以内ならばガスは日本海側に侵入することはない。つまり、八戸地方が雨でも八甲田山西側の毛無(けなし)岱(たい)では雨が降っていないことがよくあり、青森地方は雲海に覆われていることが多い。

梅雨期までの天気は、春からの延長として考えられる。このころが、高山の花畑が一斉に開花して、山がいちばん美しい季節となる。しかし、天気の判断がむずかしく、ガスの流れなどを見ながら行動することが大切である。

秋から冬の気候

台風シーズンの終わりと同時に、秋雨前線の停滞する季節に向かうが、梅雨のころの天気とは正反対に、西側にガスや雲が停滞して、東側では雲の切れ間を見ることが多くなる。

12月上旬ごろまでは、西から北西の風が多くなる。日中は暖気をともなった南西風が多く、夜は西風となって安定する。しかし、春から夏への変化と同じく、交互に変化しながら真冬に向かって寒さも厳しくなり、風向きは西から北西、北北西へと、次第に北へ向く。いわゆる西高東低の気圧配置である。

真冬(12月中旬から3月中旬まで)

日本海で発達した低気圧が津軽海峡付近を通過して、北海道あるいは樺太(サハリン)の東側に抜けると北の風が強くなる。水温の高い陸奥湾で発生した水蒸気が一気に冷やされて、青森市や野辺地町などでひと足早く雪景色を見ることがある。もちろん、八甲田にも降る。

一方、日本海の海水で発生した雪は、津軽平野を飛んで南北八甲田、十和田湖へ降り積もる。

3つの風のタイプ

北八甲田連山の配列によって、次の3つの流れの風ができる。

ひとつは津軽平野から北八甲田と南八甲田の間を吹き抜ける風。もうひとつは陸奥湾から北八甲田に一気に吹き上げる風。この風が前岳(八甲田連山の北端)で左右に分けられて、その一方が田代平を通る3つめの風となる。(図)

これらの3つの風が高田大岳、小岳、硫黄岳を吹き抜けて、再びひとつの風となって焼山高原を駆け下りていく。この風がつくる芸術品、つまり雪上面にできる風紋と樹氷は、その造形美において他の山岳をしのいでいる。

北八甲田は連山の配列によって風の流れが一定しているので、南八甲田、十和田湖にはあてはまらない。南八甲田、十和田湖は風が弱く方向性のない内陸型で、冬でもガスが発生することある。その点で南八甲田は、湿原の高山植物が花開く季節が最高である。

十和田湖は厳冬期がすばらしい。湖面から雪が湧いて舞い上がる。全面結氷することのない湖は雪の生産工場のようなものである。さらに、風による波しぶきは、湖面の木の枝に氷のカーテンをつくり、見事な光景を見せてくれる。そして、気温の上昇によって欠け落ちた氷は、岸(特に子ノ口棧橋)に打ち寄せられ、心地よい音楽を奏でる。

真冬ならではの芸術品は、大気の影響による激しく早い気象の変化の産物なのである。

